View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

新刊紹介

久下裕利著『物語絵・歌仙絵を読む　附『歌仙絵抄』『三十六歌仙歌合画帖』』

岩坪　健

本書は、著者の絵画論としては『源氏物語絵巻を読む―物語絵の視界』（笠間書院、平成八年）に次ぐ高著である。前著に関しては著者自ら、「もうこれ以上筆者には国宝『源氏物語絵巻』について論及すべき関心事が出て来ないだろうという判断があったからに外ならない。」（本書、三頁）と書かれている。しかしながら、その後も研鑽を積まれた成果の結晶が本書であり、前著において取り上げられた課題を更に掘り下げたり、新しい視点から考察されたりしている。前著を拝読して感服した評者としては、待ちに待った好著である。

本書の目次は、以下の通りである。

Ⅰ　物語絵を読む
一　国宝『源氏物語絵巻』を読む
　―〈御法〉図について
二　国宝『源氏物語絵巻』を読む
　―うち置かれた扇
三　国宝『源氏物語絵巻』を読む
　―〈橋姫〉図再説
四　国宝『源氏物語絵巻』〈早蕨〉グループについて
五　几帳の陰の姫君―源氏絵から歌仙絵へ

Ⅱ　歌仙絵を読む
一　絵画の中の〈泣く〉しぐさ考
　―佐竹本『三十六歌仙絵』と国宝『源氏物語絵巻』を中心に―
二　『異本伊勢物語絵巻』を読む
　―住吉明神現形の意図とその絵姿―
三　歌仙絵〈在原業平〉〈紀貫之〉像の変容
　―佐竹本『三十六歌仙絵』の継承と変容―
四　歌仙絵〈中務〉像の借用
　―探幽歌仙絵盗作事件―
五　小式部内侍と定頼
　―『百人一首』秘話―

Ⅲ　資料
一　『歌仙絵抄』・翻刻
二　『三十六歌仙歌合画帖』

あとがき

2014年10月6日発行
武蔵野書院
菊判　326頁
定価　本体12000円＋税

第一部は物語絵、第二部は歌仙絵について、それぞれ五つのテーマを設け、絵をただ見る・鑑賞するに留まらず、読む・読み解く緻密な作業に基づき論究されている。最後の第三部は資料編で、本邦初公開の貴重書をオールカラーで掲載している。以下順に、章ごとに概括する。

第一部の第一章においては、「本文（詞書）には記されないが、画面に描かれてある」「素材（モチーフ）」（八頁）の一つとして扇に着目する。たとえば、「源氏が手にする扇に日輪が描かれ、源氏の膝に隠れるように配されるそれが、まるで太陽が沈むかのようで」あり、それが紫の上の死を暗示している（一三頁）という指摘は、まさに鮮やかである。

第二章では、扇の論を発展・展開している。ほかの図に描き込まれた扇と比較考察して、たとえば前章で取り上げた、紅地に金色の日輪を描いた扇については、「〈御法〉図の落日の扇が、「陵王」の入る日を返す撥に見立てられて、紫の上の死をできれば回避したい光源氏の胸中を形象化した日輪であった」（四〇頁）という卓論に至る。ただしそれが、学会で横行している「深読み」や「自己創出の理論（思いつき、こじつけ）」（一九頁）と一線を画すのは、本書が徹底して用例に基づいた論考に則っているからである。著者には高著『狭衣物語の人物と方法』（新典社、平成五年）があり、

本論においても『狭衣物語』など他作品の用例も扱い、扇の表象について客観的に探究している。

第三章では、国宝『源氏物語絵巻』において〈垣間見〉や〈囲碁〉などの場面が繰り返し描かれていることに着目して、複数の図に見られる同じモチーフを照応しながら図像解釈を試みている。それは今まで一図だけ取り上げ議論されてきた風潮に対して、警鐘を打ち鳴らすものである。そしてモチーフが登場人物の「心中を忖度し、代弁、象徴する機能へと高められて」（六〇頁）いることまで突き止めている。

第四章では表現内容のみならず、画面形式（横幅のサイズ）をも問題にする。〈柏木〉グループの八図は内容面で主題が二つに分かれ、画面の大きさも異なる、という通説に異を唱え、「断絶」という統一主題を提唱された。それを受けて〈早蕨〉グループの六図もまた従来の解釈に対して、「底流に宇治の物語を据え」て主題を「翻弄」（七九頁）と見る新説を披露している。

第五章では、著者の前著『物語絵・歌仙絵を考える―変容の軌跡』（武蔵野書院、平成二三年）において、画中の几帳が人物の胸中を表現していると示した論を継承・発展させて、いかに几帳が有効な絵画的モチーフとして機能しているか詳述されている。源氏物語絵において几帳は貴女のステータスシンボルにされた、という拙論を修正して、その指摘は源氏絵ではなく、むしろ「歌仙絵の几帳に対して最も適合する」（一〇九頁）と説き、第二部へ橋渡しされている。

第二部第一章では前半に佐竹本『三十六歌仙絵』〈斎宮女御徽子〉図、後半に国宝『源氏物語絵巻』の朱雀院を取り上げる。「歌仙絵の図像とその画中歌との関連性、対応性」（一二五頁）に着目する新しい視点を導入することにより、斎宮女御の「袖の単衣で顔を覆うしぐさが〈泣く〉姿であること」（一二八頁）と読み解かれた。また朱雀院が〈泣く〉しぐさでは、「手や指先を露わにしている」（一三八頁）という、他に例のない「特異な姿形」（一三九頁）であることを初めて示された。

第二章では中世に作成された『伊勢物語』の注釈書や説話など多数の資料を縦横無尽に駆使して、『異本伊勢物語絵巻』に描かれた住吉明神に関する従来の解釈の不備を指摘して新説を立てられた。

第三章では「歌仙絵の中で身分官職を表徴するはずの装束までを一新して、最も変身するのは〈業平〉図」であり、「この図像の変化を〈斎宮女御徽子〉図と同じように採歌の相異に拠る」（一六〇頁）と説かれた。また〈紀貫之〉図では、和歌のみならず『百人一首』の歌仙絵にまで論及して、「三十六歌仙絵」と相違する背景に迫る。

第四章の副題に示された「盗作」とは「図像の転用・流用」（一七六頁）を意味する。たとえば「百人一首絵」の〈清少納言〉図に描かれた扇には「紅梅と萩とが重ね描きされている」（一八〇頁）。その理由を、佐竹本〈中務〉図や『百人一首画帖』の〈紫式部〉図などを手掛かりにして見事に解明された。

第五章では、『百人一首』に採られた小式部内侍の和歌は、中納言定頼と一緒に仕組んで詠まれたと見なす仮説を、歌集や系図などから検証されている。

本書を拝読して、とりわけ感銘を受けた個所を抜き出してみた。ほかにも絵の隅々に至るまで見逃さない眼光には敬服するばかりである。このように広範囲に及ぶ目配りと、深く掘り下げた洞察力とが本書の魅力であり、啓発された点は多々あるが、紙面の都合で割愛させていただく。なお第三部の資料編に掲載された写本・版本の影印はぜひ手に取り、その美麗さを愛でていただきたい。衣装の文様に至るまで緻密に描かれた、見事な細密画である。

最後に蛇足ではあるが、本書にはカバー絵と同じカラー写真が口絵にもある。これは図書館に配架される際、カバーは外されてしまうことを配慮されたからであろう。ここにも細部にまで目を配る、著者の気配りが感じられよう。

（いわつぼ　たけし　同志社大学教授）